
cube × cube

レプリカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

c u b e x c u b e

【Nコード】

N 1 0 5 8 A

【作者名】

レプリカ

【あらすじ】

自由研究をテーマにした小説です。

1 / / b a d m o o n

崩木柚子 技師

崩木霧忌 パイロット

斑鳩燕 設計者

空を眺めていた。

一繋ぎの青を。

綺麗だと思う。

青という色は千差万別たくさんある。

それは多分人が青を好きだからに違いない。

僕はツクリモノに興味はない。

あの青だけが、

/ / B a d M o o n

「崩木」

そう僕を呼ぶ声がする。

祖父だ。

祖父はけして僕を名前で呼ばない。

「なに、」

自分でもわかる程やる気の無い返事。

「感覚神経フィラメントが馴染んでない。調整しておけ」
クレイジイ。

祖父をそう評価している。

またそう思った。

「これ以上シンクロを高くしたら過敏すぎるよ。微風一吹きでたちやうよ」

タバコをくわえながらそういうと祖父は僕に拳骨を食らわせた。

一瞬視界がホワイトアウトするくらい強烈なヤツをだ。

「やれ、拒否権はない」

言いたいことだけ言いやがる。

僕はわかったよと頷いてベランダを後にする。

部屋は暗く埃臭い。

しかも通気性が悪いので気が滅入るには最適だ。

この僕達がいるのは人工的に創られた島、さらに範囲を狭めればその古くさい時計塔。

島の名前は himmel

空を冠した美しい名前。

けど、と僕はすぐに思い直した。

だって人が創ったものに美しいものなんて在りはしないのだから。

冷たいオブジェと人は変わらない。

僕達に意味はない。

だから好勝手できるんだ。

こうしてここで続ける夏休みみたいに破滅を待ってるんだ。

僕はそんな事を考えながら最下層へと馬鹿の一つ覚えみたいに続く螺旋した階段をおりる。

かつかつ響く足音は不覚にも好ましい。

それは僕の欠陥が二極化を許さないために起こる必然的なものだろう。

「斑鳩、フィラメントの調整にきた」

螺旋の終焉はただっ広いキューブ体の部屋だ。

学校の体育館よりずっと大きい。

そこには人工照明に照らされたどれだけの水が有るのかワカラナイほど深いプールがある。

しかしそのプールでは泳げない。

少し勿体ないと思う。

「どこの？ボディはもうプールではないか」

「違うアーム」

端的に言々と斑鳩は手招きをした。

「ああ、いいよ」

斑鳩は好ましい対応をしてくれる。

余計な会話はして欲しく無いのをよく察してくれるし僕の領域を汚さない。

あの坊主とは大違いだ。

「感覚の感度を上げる」

僕がそういうと斑鳩は呆れたように頷いた。

作業中は静かなもので実にやりやすい。

企業の雑多な感じは性に合わない。

まずなにより人が邪魔だからだ。

「アームは今日でプールだから」

なるほど、それで。

僕は手っ取り早く作業を終わらせて立ち上がる。

「それじゃ霧忌に伝えとくから」

斑鳩はそのままコーヒーを手に階段を登っていく。

脚が悪くて杖が無いとマトモに歩けなくせに斑鳩は歩くのが好きだ。

誰の手も借りない。

そういう姿勢は正しい気がする。

だって一人なのはべたべたしてない。

僕は祖父が来るまで三日振りの睡眠を味わう事にした。

くらくらする脳みそがプールに映した照明を月みたいに見せていた。

sky dust

/ / 機械仕掛けの朝顔

天津道照 僧

崩木 柚子 技師

アナログとデジタルには何ら差異は認められない。…結果が同じならば。

だからきつと人は脳の錯覚に酔い続ける。甘い甘い痛みに。
だから気紛れな電気信号に惑わされてはいけない。

僕はこんな脳みそぶちまけて、もっとシンプルでシーケンシャルな回路が欲しい。

僕の前には1と0だけでいい。

「猥雑な君には理解しがたいだろうけど、天津」「人に理解を求めるなんてナンセンスだよ崩木さん、理解をしたつもりにしか人はなれないし伝わった気にしかなれない。」

思考も処理も違うのに同一の答えなんてでないよ」

「知ったような口、」

「ほら、つたわんない。けど、そういうところが愛しいんだろうね」

「なんで、そんな事いうわけ？」

「さあ、崩木さんなら答え知ってそうな気がしたから」

「答え？」

「相手の心に伝える方法」

「いま自分で否定したばかりじゃん」

「うん、だから覆して欲しい」

そついつて天津は狐みたいな面を笑わせた。

「天津はいちいち人の意見を鵜呑みにするか？僕はそついつた人種は幸せだと思うよ。」

そついう思考が僕も出来たらいいのに」

「直ぐには信じれないよ、試験と施行を繰り返して納得するまで保

留中」

「研究者には時間だけが足りない」

「なにそれ」

「老いぼれを見てた少女の言葉。言葉ではどうか知らないけど…天津は信用してる気がする。そう観察できる」

「証明したいんだ、それを」

「誰に？」

「…ん、まあ。知り合い」

なんとなくどんな知り合いかわかってしまった。

「あ、そう」

興味無さげに呟いた。

「とにかく、」

其処で言葉を切って空を仰ぐ天津。
眩しいに違いない。

「綺麗事にはもう沢山なんだ」

「あの日は綺麗事しか吐けなかった癖に」

「いちいち細かいところ、なんだか職人っぽいよね。」

「僕は技師。仕事以上の技は使わないし、知らない」

「…そうだね」

「そうだよ、もう職人は死んじゃった。僕が一番大事な空を汚しちまってる」

僕もほんの気紛れに空を見上げた。

あの日から空を眺めるのは止めてしまったけど、やっぱり蒼い。

「雨でも降ればいいのに」

こんなに天気が好いと竜もはばたいてしまいたいだろう。
きつとあんな破滅が再び待とうとも、

あれがはばたく機能を有する限りは悉く、墜ちていくに違いない。
い。

空が終わるその刹那まで。

Crimson teatime

崩木柚子 技師

斑鳩燕 設計者

斑鳩燕は天才だった。

環境にも恵まれていた。

幼い頃から彼女は大学に出入りしては書物を時間の対価として消費した。

彼女は若さとその他でも無い彼女自身が創りだした成果で多大な称賛と、惜しまれぬ賛美に包まれた。

しかし、今は彼女に触れたがる人間はあまりいない。

それは斑鳩燕の右脚が二度と十全な働きをしないのに関連があるらしいが気にしなかった。

僕には相手の以前に興味は無い。今を以て天才である必要がある。才能は開いてる内に出会わないと大して意味が無い。

散った花を愛でる粹狂は持ち合わせていない。

「ああ、そうだ君の祖父には感謝してるよ」

作業も仕上げに入るとき、斑鳩は急にそんな事を呟いた。

「いつ言おうかタイミングに困っていた」

「何で僕に言うの？」

「君は私の設計に忠実に仕上げてくれるからね」

「今まで、そういう経験無いわけ？昔は有名だったんでしょ？」

「どちらの質問から答えたらいいかな」

「時間列から考えて前者または二つの質問を併せて合理的な回答を」

「機械みたいな返答だ」

斑鳩は少し笑ってうなずいた。

「有名であることで人は集まったの。それこそ電子機器から車まで、何でも創れるくらいにね。けどそこに満足だけは無かった…こんなんでいいかしら？」

僕はただ頷いた。

斑鳩にけられた技師達には何の感慨も抱けない。

仕方ない。求められるモノを持ち合わせていないのだから。

そういう因果は神様が決めていて、皆何処かに自分の能力を活かせる場所があるに違いない。

神様、きっとシステムみたいに愛しいヤツに違いない。

「翔ぶと思う？」

頬杖ついて斑鳩は柔らかい笑顔でそれをみつめる。

「翔ぶさ」

僕は速答する。

「どうして？」

「斑鳩が考えて、僕が創った。どこにケチがつく？」

「そうね、…そうだといいわ」

夢に浮かされたみたいな午後。

少し温い紅茶とケーキの三角。

「、」

なにか言おうとしたけど結局口をつぐんでしまった。

言うべき言葉がよくわからなかった。

きっとエラーだ。

どうして、いつも、最善でいられないんだろう。

「後百年早く生まれたかったよ、そうすれば良かった」

少しだけ、そういう斑鳩に同情した。

「崩木、君は大したスベックだよ」

「褒めるな、僕は僕の仕事をしたに過ぎないんだから」

「それが出来る人間はそういないよ」

紅茶はもう冷めた。

そろそろ飲み頃だろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1058a/>

cube x cube

2010年10月28日08時27分発行